

## メールレター(53)

### 初夏の訪れ

コロナ禍に追われ、気がつくともう半年が過ぎていました。暑い日が続いています。長い冬の後、一足飛びで初夏になってしまったかのようです。一夜で、芽がでて、葉が茂り、花が咲きました。リラの香も街並みに漂っています。過激な季節も変わり方です。

と、喜んだ途端に、どーんとシベリアから寒い空気が流れ込み、寒さの逆戻りです。慌ててしまいこんだ冬物を取り出して着込みました。テラスの野菜も元気がなくなり、この寒さに耐えてくれるかどうか、気が気ではありません。来週から、暑さが戻ってくるようです。マダム田中とドリトル先生の老体の、季節のアップダウンへの対応はやや遅れがちです。

母の日には、出前の美味しいお寿司(極めて稀)を娘一家と食べ、お祝いしました。次のドリトル先生の父の日の出番の構想を練っているところです。母の日は、家中が母親の周りに集まりお祝いする、極めて大事な家庭行事なのです。女が家を仕切り、男を仕切る(マダム田中には無理ですが)北米では、この日に母親を無視するなんてとんでもありません。この日は、花屋も大忙しです。気持ちを伝える花の贈り物の配達に朝から晩まで追われます。一年の収入の半分をこの日に稼ぎだします。マダム田中には、フレデリクトンの義理の次男からボタンの花の贈り物が届きました。家の中が一辺に華やかになりました。

そうこうするうちに、ケベック州ではコロナのワクチン接種が75%に達し、少し規制が緩和されつつあります。夜間外出の規制がなくなり、レストランもテラスのみ食事が可能になりました。若者は一気にタガが外れ、朝方までマスクをつけず繰り出し、警官が取り締まりに必死なようです。

ドリトル先生は、外の若者の嬌声に苦笑いしながら右肩をさすっております。手術後一月半経ちましたが、回復には程遠く、思うように動けない苛立ちを感じているようです。医者からは、回復には4~6月かかると言われているのですから、まだまだ先が長いのですが、我慢できないようです。医者の不養生というのでしょうか、リハビリには熱意がなく、時折、腕を上げたり下げたり、伸ばしたり動かしていますが、リハビリセンターにも通わず、自己流のため、治りがいまいちのようです。

肩の手術を3年前にした長男に、

「パパ、ちゃんとリハビリしなくちゃダメだよ。」

「センターの受付の感じが悪いし、遠すぎる。」

「じゃ近くのリハビリセンターを紹介して貰えば」

などと言われているのですが、

「コロナだから行きたくない。」

理由は山のようにあるようです。マダム田中の手には負えそうもありません。そのうち治ると思うことにしています。

こうしたドリトル先生の日々を遠目に見ながら、娘は子育てに追われております。子育てを何語ですか、考えていたようですが、結局、フランス語に決め、

「マ、シェリー(フランス語ですかma chérie,)」

と語りかけております。その横で、婿殿が英語で話しかけています。ここでは極めて一般的なバイリンガルな育て方なのですが、孫娘の頭の中は忙しそうです。「結局、私はマイペース」、そんな態度で親たちを眺めているようです。

こうしてみると、義理の息子達を入れた、ドリトル先生の4家族はモザイク状の言語体制になっているようです。同じ国籍や文化で育った人たちはいないのです。言語もバラバラです。ドリトル先生はフランス人で、マダム田中は日本人、娘は、ケベック州育ちでも基本的な教育はフランス風フランス語(ケベックとは違います)と日本語。

義理の長男はケベックの教育でも両親ともフランス人。価値観にややギャップがあります。最初の奥さんは、純粋なケベック人で、ケベック風フランス語を話し、暮らし方もケベック風。長男の二番目の奥さんはルーマニア人でフランス風のフランス語を話し、ヨーロッパ的な価値観をもっています。義理の次男はケベック育ちで奥さんはリモージュ育ちのフランス人。子供達はフランス風のフランス語を話し、ユーモアもフランス風ですが、住んでいるのが英語の影響の強い、バイリンガルな地方都市です。娘の夫は、フランス語とは縁のない、オタワ育ちの完全な英語系。全員が集まると会話はフランス語が主流ですが、孫たちは、例外なく婿殿と英語で話して遊んでいます。これが極めて自然で無理がないのです。コスモポリタンなモンリオールだから可能なのかもしれません。バイリンガルな孫達が、モザイク状の言語と文化を駆使しながら、アメリカナイズされたカナダでどういう風にこれから育っていくことになるのか、興味深いところです。